

□Hara, H.: **A Revision of Caprifoliaceae of Japan with Reference to Allied Plants in Other Districts and the Adoxaceae.** Ginkgoana No. 5. 336 pp. 4 colour+55 pls. 1983. アカデミア洋書, 東京. ¥12,000. 本書はスイカズラ科とレンブクソウ科の日本産種を中心としたリビジョンの形をとっているが, 日本に自生しない近縁のタクサについても取り上げていて, 全体的には両科のモノグラフ的な論文となっている。例えばスイカズラ科に属する全部の亜科, 連, 属に対する検索表があり, また日本に分布しない6属それぞれについて簡潔な解説がある。その中でスイカズラ属に近縁の *Leycesteria* については種までの検索表も加えられている。これによって属レベル以上で科全体を知ることができ, また日本産属の分類学的な位置も明らかとなる。ガマズミ属では世界中の節と亜節について解説と検索表があり, 相互関係を推定した系統樹(43図)も発表されている。またツシマヒョウタンボクでは朝鮮, 満州の標本が, タイワンツクパネウツギでは台湾の標本が日本からの標本と共に引用されている。同様に, レンブクソウ科も2属3種よりなる小群であるが, 科のモノグラフの形をとっており, 中国特産属 *Sinadoxa* と特産種 *Adoxa omeiensis* Hara が含まれている。形式的に不統一のようにみえるが, その内容を吟味してみると日本産のタクサに関連する多くの分類学的知識が幅広く, 巧みに集約されていることが判る。

スイカズラ科は3亜科14属約450種よりなり, 日本には8属55種が自生するという。日本のものは1921年に中井先生がまとめられ, 約60年たって今回原先生が再検討された。本書の分類システムは中井先生のもとの根本的に変わってはいない。本書では各タクソングとに主要な文献, シノニム, 和名が挙げてあり, 次いで記載, 染色体数, 花および果実の時期, タイプ標本, 分布と生育地, 分類学的なノート, 主な標本という項目が続く。分布図の他に花, 冬芽, 雄蕊, 種子, 葉など主要な形質が図示されている。レンブクソウ科も同様にまとめられている。タキネツクパネウツギ, エゾヒョウタンボク, レンブクソウなど新組合せと新名31個の発表が含まれている。記載は簡潔で特徴を非常によくとらえており, 証拠となる標本は充分に引用されている。スケッチと分布図が74図, 巻頭にカラー・プレート4葉, 巻末にモノクロ・プレート55葉がある。プレートは主な種類の花期や果期の写真あるいは花粉, 葉や花弁などの走査電子顕微鏡写真が多い。生態写真は種類の特徴がよく現わされており, 花粉の写真も見事であるが, 花粉形態は分類形質として使われていない。残念なのは標高を示すらしい線の入った日本地図(8, 59図など)が不鮮明で, 分布を示す点の位置が判りにくい。

原先生はスイカズラ科がお好きで, 研究を始めて50年にもなれるという。各種類について生時の様子を実によく見ておられ, それを基礎としたうえで多数の標本を活用し, 今後の研究で再確認できる安定した形質を抽出してタクサを設定されている。本書で引用されている多数の標本は, 将来の研究の発展にとって不可欠の基礎となるであろう。分類学の本筋を示す立派な研究であり, 本書は重要な文献として高く評価できるもので

ある。原先生の長い間の学問的集積の一部が立派に実を結び、心からおめでとうと申し上げたい。
(大橋広好)

□倉田 悟・中池敏之(編):日本のシダ植物図鑑 3 728 pp. 地図 1. 1983. 東京大学出版会, 東京. ¥12,000. 待望の第 3 巻が出た。大要は巻一, 二と同じである。100 種について第 1 頁に写真と主な解説, 第 2 頁に全体の線画と要点, 第 3 頁に分布図, 第 4 頁以下には 5 万分の一の地図を四分してその区割に 1 点を打つ式で, ミゾシダ, ジュウモンシダ, イノデ, ゲジゲシダ, ホシダ, ヤワランシダ等は 15 ページを越えた産地が挙げられている。これは何でもないようだが大変なことである。ホシダでは密に産地が並ぶのに, イワランシダでは甚だしく疎在しているのは何か原因がありそうだ。一つ注文がある。それは細かく産地を挙げながら海拔高に触れていない。これはシダでは余計に必要と思う。分布地図にもないし, 産地はこの頃殆んど市か町になってしまったのでシダの産地としては不適當に思われるから, 海拔高をざっと付記してほしいと考えるのは抄録者だけではないと思う。今後の続巻に期待するからなおさらである。
(前川文夫)

□青島清雄・椿 啓介・三浦宏一郎(編):菌類研究法 423 pp. 1983. 共立出版, 東京. ¥15,000. 菌類の研究法としては, これまでに自然観察を中心としたもの, あるいは応用微生物学の一環として土壤微生物, 植物病理学, 医真菌学, 醗酵微生物, 食品衛生などの諸分野での実習書が出版されているが, 本書のように菌学に関する基礎から応用, ことに自然における各種生態系を対象とした研究法まで編集されたものは例をみないであろう。内容としては, まず菌類を取扱う基本操作が述べられた後, 第 2 部としてこれに関連する微生物実験のための機器が紹介されている。本書の中心は第 3 部の各論で, 菌類全般について分類群, 生態群別に採集・分離・培養・保存の方法を図, 写真を豊富に配して, それぞれの分野の専門家が分担執筆している。扱われている対象は, 変形菌類, 水生菌類, 海生菌類, 土壤生菌類, 糞生菌類, 落葉生菌類, 盤菌類, 異担子菌類, 軟質担子菌類, 硬質担子菌類, 植物寄生菌類, 菌根菌類, 菌寄生菌類, 人体寄生菌類, 高等動物寄生菌類, 水産動物寄生菌類, 昆虫寄生菌類, 微小動物寄生菌類, 被服その他生活関連の菌類などと実に広範多岐にわたっている。採集・分離された菌類の利用という面では, 第 4 部に大量培養を, 第 5 部にライフサイエンスとして発展の著しい遺伝子導入を解説している。最後に菌類に関する行政事項が一括されているのは本書の利用者にとって大変便利であろう。記述は一般に平易であり関連文献も詳しく, 研究あるいは実務のための座右の書として情報を得るには恰好の研究書といえる。
(宇田川俊一)